

SSRI

Give me a break !

ちょっと一言

SSRI石井研究員、尖閣諸島に関する中台主張の矛盾指摘

樋口 譲次

朝日新聞デジタル（2017.11.17,1824）によると、長崎純心大准教授で、SSRI研究員でもある石井望氏が国会内で会見し、中国や台湾が尖閣諸島の領有権を主張する際に根拠として示している有力資料の一つが、同氏の研究によって、尖閣諸島ではなく台湾島の東南の島について記されたものであることがわかった。

中国や台湾が、尖閣諸島は台湾の一部と主張する根拠の一つとして、18世紀に清の政府高官が記した『台海使槎録（たいかいしさろく）』に「釣魚台」の記述があり、これが尖閣諸島だとしている。

石井研究員は、今年9月、台湾当局が1970年に作成した地理書『台湾省通志』に『台海使槎録』が引用され、「釣魚台」が台湾島の東南の島として記述されている箇所があることを見つけた。

石井研究員は、「尖閣諸島ではなく、台湾東南の別の島のことだと台湾当局が認めていた」と指摘した。

会見に同席した長尾敬・自民党外交副部長らは、今後こうした資料を日本政府が対外発信で活用するよう働きかけていく考えを示した。

石井研究員の長年にわたる地道な研究の成果は、「尖閣諸島は日本固有の領土であることは歴史的にも国際法上も明らかであり、現に我が国はこれを有効に支配している。したがって、尖閣諸島をめぐる解決しなければならない領有権の問題はそもそも存在しない」とする日本の立場を、一層強固に裏付けるものとして高く評価されるべきである。

（2017年11月12日）